

◆荒井類 選

《「盗人」という言葉が名前につくから》

空財布盗人萩の仕事かな

物江晴子

財布が空なのは、いくらなんでも植物の「盗人萩」のせいではなからう。そんなことは百も承知の上での言葉遊び。

禅林に盗人萩が実をむすぶ

阿部ひろし

禅林は禅宗の寺院。禅の修行者（＝真面目な人）の集うところに、盗人（＝不真面目な人）の名を冠した萩が「実をむすぶ」とはなんたることか！ と、これも言葉遊び。

東御苑盗人萩も伺候せる

萩野嘉代子

伺候（しこう）とは、「謹んで貴人のそば近く仕えること。（『大辞林』第四版）」であり、「東御苑」とは皇居の東御苑であろうから、「盗人」萩さえもお仕えしている！ という言葉遊び。

《付喪神（つくもがみ）を彷彿とさせる》

貌が棲む芒の中の捨て鏡

中村苑子

芒の中に鏡が捨てられている。そこには「貌」が棲んでいるという。う～ん、わかる。

「^{はきやう}破鏡の^{なげ}嘆き」（破鏡の^{たん}嘆）という言葉をご存じだろうか。「夫婦が離縁しなければならぬなげき。（『精選版 日本国語大辞典』）」のことである。辞書の定義の言葉づらだけからいえば、「離縁しなければならぬなげき」を嘆くのは夫（男）でも妻（女）でもよさそうに思うが、これはやはり女の嘆きだろう。鏡に棲んでいる「貌」は、女の貌でなくてはならない。

（これは女性差別とは関係ない。純粋に「文学的」な感じを述べたものだ。）

付喪神とは、「主に室町時代の物語や絵巻に現れる妖怪で、食器や調度、楽器などが年を経て化けたものといわれる。（『日本歴史大事典』）」。

女の人が長年愛用した鏡は付喪神と化して、そこにはそれを愛用した女（ひと）

の「貌」が棲んでいる。掲句から、そんなストーリーが頭に浮かんだ。これを滑稽俳句の一句に数えたい。

《日本全国に「猫塚」がある》

猫塚にそれからがあり冬はじめ 石口榮

筆者の勝手な読み方かもしれないが、掲句を一読して、「なるほど」と思いニヤッとした。以下、詳細に述べさせていただく。

「猫塚」は各地にある。たとえば、両国（東京）の回向院には鼠小僧次郎吉の供養塔があるが、その左側に猫塚がある。この猫塚には「猫の恩返し」の逸話がある。

〈猫を大変可愛がっていた魚屋が病気になり、生活に困っていた。するとその猫がどこからともなくお金（二両）を運んできて魚屋を助けた。だがある日、その猫がいなくなってしまう、心配した魚屋が調べてみると、ある商家からお金を盗んだ猫を、奉公人が殴り殺してしまったということがわかった。魚屋が事情を商家の主人に話したところ、その主人は「猫の恩返し」に感銘し、魚屋と商家の主人は、二人で回向院に猫塚を設けた。〉

この「猫の恩返し」という話は落語にもあるという。その他、松乃木大明神（大阪府大阪市西成区）の猫塚や、秀林寺（佐賀県杵島郡白石町）の猫塚等、日本全国に猫塚がある。

日本全国に「猫塚」があれば、「猫塚」の「それから」もあることだろう。そのように読むのがマトモなのかもしれない。だが、筆者の頭の中では、別の連想が浮かんだ。

「猫」といえば、『吾輩は猫である』。そのすぐ後に「それから」とくれば、『それから』は、『三四郎』『門』と共に三部作をなす夏目漱石の小説である。

『それから』は、『大辞林』（第四版）によると、「[分類] 日本（文学）小説。夏目漱石作。一九〇九年（明治四十二）発表。高等遊民代助は、人妻三千代との再会を機に、現実との対決を余儀なくされる。生活と道義をめぐって近代知識人の問題を探った作品」。

なお、「高等遊民」とは、大学等の高等教育機関を卒業しながらも、経済的にゆとりがあるために労働に従事することなく、読書などをして過ごしている人のこと。

『吾輩は猫である』の天真爛漫につづき、高等遊民と人妻との「不倫」＝生活と道義をめぐる近代知識人の苦悩。掲句は一句で夏目漱石の文学を総括している、といったら褒め過ぎか。

季語は「冬はじめ」。これがいいと思った。もしも「漱石忌」を季語としていたら、それは露骨すぎる。「漱石忌」は十二月九日であるから、「冬はじめ」でよかったと思う。

筆者のこういう読解は強引過ぎるかもしれないが、このように考えると、掲句はなかなかの滑稽俳句だとおわかりいただけるだろう。

(文中敬称

略)